

## 沖縄を語るということ : 地中海島嶼社会を語るこ ととの比較において

著者	新原 道信
雑誌名	沖縄文化研究
巻	23
ページ	135-171
発行年	1997-03-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00015815">http://hdl.handle.net/10114/00015815</a>

## 沖縄を語るということ

～地中海島嶼社会を語ることとの比較において～

新原道信

Das leichteste ist, was Gehalt und Gedicgenheit hat, zu beurteilen, schwerer, es zu fassen, das schwerste, was beides vereinigt, seine Darstellung hervorzubringen.

「もっともたやすきことは、実質のある堅固なものを裁くことである。より難しいのはその内実をつかむことである。しかしもっとも難しいのは、つかみそして自分で判断することを結び合わせて、おのれの表現にて表しだすことである。」ヘーゲル『精神現象学』序言より

### I. はじめに ～日本〔語〕で沖縄を語ることの困難さ～

調査を旨とする研究者でありながらなかなか調査ができないのはなぜか。私はなぜ調査ができないのか。地域で生計を立てそこで死んでいくもの、言語表現の背後にあるものを把握したい。語れないもの、語られなかったものを語るとはいかなる営為か。被調査者と距離があり、しかもその距離が権

力関係をともなうものである場合、被調査者が考えていることを、強引に調査者の思考・言語体系の中に押し込めてしまう危険がある。被調査者が生活している「場」の「社会的文脈／水脈（*contesto sociale*）」（1）に即して感じとること、そのものとして了解すること、その上である文脈にのみこまれた自分をもう一度とりもどそうと格闘する過程で出てくる、ぎりぎりの言葉をつなぎあわせて、その数少ない言葉から、複合体としての事実の内実（*Gehalt and Gedicgenheit*）を出来る限り把握しようとする、さらには把握した事実を表現することの不可能性を知りつつも言葉で表現すること。地中海の島サルデーニャと沖縄を比較研究する中で、私は、こうした問題に取り組んできた（2）。私は沖縄あるいはサルデーニャで生まれ育ったわけではない。しかし研究者としてはサルデーニャと沖縄を比較して研究することを旨としている。しかも調査研究を旨としていて、サルデーニャについてはある程度の、沖縄についてもいくばくかの「土地勘がある」（3）。その上で、なお問う必要がある。なぜ、サルデーニャと沖縄なのか。

沖縄とサルデーニャは、それぞれ日本社会とイタリア社会にあって、言語的・文化的な複数性と複合性を認めつつ社会を創っていくという営みを考える時に、避けてはとおることができない地域である。複合文化社会を形成するという試みには、二つの相異なる視角が内在している。すなわち、ひとつは社会をより効率化していくためにはむしろ多様性をシステム内部に取り込むことによってシステムそのものが強化されるという視角である。この視角によって認識されている異質なものの多様性は、

あくまで「一様な (einfach) 多様性」(すなわち「様々な言語・文化」ということでオペレーションの対象として一括されているという意味での多様性)である。

村井紀が『南島イデオロギーの発生』の中でいみじくも指摘したように、「実際の沖縄とは別に『原日本』として見いだされる『南島』は、自己同一的な『日本』を作り出すための差異として指定され、馴致され、鋳型に流し込まれて見いだされている」、つまり、「『南島』は、同質的な『日本』を固定するための微妙な差異として、またもっともリスクの少ない、安全な『比較』対象として固定され」(4)たのである。

これに対して、互いの異質性を意識しつつある個人や集団の側から見ると、形成されるべき社会は、質的に位相のことなるちがいをもった個々のエレメントによって構成される社会である。この立場から見ると、個々のエレメントのそれぞれが、いくつものΛもうひとつの沖縄VやΛもうひとつのサルデーニャVを構想し、その結果として日本社会やイタリア社会を予想もしえない方向へと導いていく可能性をも有している。既存の枠におさまりきれない矛盾した諸要素としていくつものΛもうひとつの地域Vを顕在化することによって、複合文化社会は内実をともなった形で具現化するのである。

日本社会と日本人を見直すという試みは、日本社会の内なる異質性を収集し羅列することでは実を結ばない。日本社会の中にあつてコンフリクトを生じさせつつ生きるヘテロジニアスな個々の要素

が、自己を表わし出して自己革新すること、日本社会と日本人の自己革新・再発見は、緊張関係を有しつつも同時に止揚されるべき課題として、われわれの眼前に投げおかれているのである。個々人の心意現象のかたわらで声をきき、へいくつものもうひとつの沖縄Vを構想し、その中で沖縄を語ることにともなう困難をいかに乗り越えるか。この問題を個人の研究史に即して考えてみる。

ふりかえれば、一九八〇年代後半におこなった沖縄、広島、長崎の平和運動の調査においては、語られていないことを聞くことを念頭においていたものの、実際には、目立つ人、目立つ運動、組織化された運動を調べていった(5)。私の主観的意図にかかわらず、行政主体として組織や集団の中における個人としてあくまで外側から対象を見ていくことになっていた。それゆえ社会科学的認識のレベルにおいては、主体は構造の変数だという理解をしていたことになる。であるから人々の生活はひとまず括弧にいれて、生活を規定しているはずの構造を分析しようとした。だから「構造V」がつかめなかった。組織、集団は出てきても個の内面を見るためのカテゴリーをもってはいなかった。マクロな社会変動とミクロを切って考えていて、ミクロをミクロとしてしか理解しないし、「辺境」の問題としてしか理解しなかった(かあるいは恣意的に過大な評価をしていた)。

つまりは、沖縄と東京、調査者と被調査者といった二元的な図式の中に押し込めて複合的な現実を理解しようとしていたのである。自分の中にある構造をつかまないことには、日本資本主義の構造分析をしても主体は構造の変数でしかない。しかし実際の個々人、複合体としての個々人は、ある地域

社会の中でいろいろなつながりをつくって、葛藤をもちながら行動している。そのひとりひとりが個として生成してきているという個人の形成のプロセスと、その人を横目でみている人、直接的には手出しをしなくても情情的には支援をしていたりするという事態をとらえる社会科学のカテゴリーの必要性を感じた。こうして足元を見るための「方法としての旅」(6)を考えた。自分の中にある社会とのかかわり方Vと類比可能なへかかわり方Vを他の社会的文脈においてするというところみである(それが他の社会的文脈への介入であることはまちがいないのである)。

そしてこの一〇年ほどの間、私は、地中海の島サルデーニャと沖縄を「寄港地」として、さまざまな体験をして、経験と記憶を蓄積してきたのだが、その内容はいかなる言葉によって表し出されるのが内容にかなっているのかをずっと考えてきた。そして体験し感じとり知覚した事実を、ひとつのまとまりとして表わし出そうと試み、何度も挫折してきた。土地や人に深くかわかるほど、調査者である自己の認識と、寄寓者である自分の実感との間に、ズレがひろがるのを感じてしまったからに他ならない。身体の中かに刻み込まれて、想念としてここにうかぶ地中海の島と沖縄の風景を、その内実を表し出す言葉を、私はながらもたなかった。むしろ、はじめは対象として語っていた相手を、だいに語れなくなり、調査票をもって調査をすることにもためらいが生じるようになった。ひとつとの中に埋め込まれている文化の複数性と複合性に出会い、私自身のものの見方の枠組みが流動化するのをうっすらと感じた。サルデーニャと沖縄は、「一様な(einfach)多様性」の枠の中に整理分類

しようとするものを解体するような力をもつ。反逆する対象である。

なぜ沖縄とサルデーニャか。語れないもの、語られなかったことを語るとはどんな語りか。この問いには、私が沖縄とサルデーニャにかかわることによって、語る言葉を失い、自分がこわれ、そしていつしか対象を語っているつもりが自分を語り、同時に、自分を語っているつもりが沖縄とサルデーニャを語っている——こうしたことがら(Sache)と自己との不断の相互浸透をくりかえすことによつてしか答えられないであろう。この根元的な問いにすぐには答えられないとしても、もう少し具体的な、対象認識の方法とかかわる問いは、本稿の中で考えることも可能であろう。すなわち、日本〔語〕とイタリア〔語〕で沖縄を語るという方法についてである。

私は、一九八七年、一九八八年、一九八九年、一九九一年、一九九三年、一九九四年、一九九五年、一九九六年とサルデーニャを訪れ、滞在中は、サルデーニャの内陸部の村々を訪ね様々な人々と話をしていく過程で、少しづつ理論内容の検討を重ねていった。サルデーニャにおいて沖縄を考えるとこの営みは、日本語と日本社会の文脈で考えることから遮断あるいは解放されて、自分の感覚・知覚に即した言葉を探る過程であり、表現方法としてはイタリア語が選ばれた。この場ではじめて体験したことについてはもちろんのこと、イタリア語で沖縄と日本のことを考えたのには、異化作用があったかもしれない。少なくとも私にとっては、語りえない沖縄を語るためのひとつのころみであった。

ここには四つの語りがある。すなわち、①日本〔語〕で沖縄を語る、②イタリア〔語〕で沖縄を語

る、③日本〔語〕でサルデーニャを語る、④イタリア〔語〕でサルデーニャを語るである。それぞれ、「語」のところに〔語〕という括弧がつけられているのは、「日本〔語〕で語る」は、日本社会がもつ歴史的規定性を自明のものとして受け入れている人々に対して日本語で語る、「イタリア〔語〕で語る」は、イタリア社会がもつ歴史的規定性を自明のものとして受け入れている人々に対してイタリア語で語るということを意味する。さらに、沖縄やサルデーニャについて、東京で語るのか、横須賀で語るのか、名護で語るのか、あるいはミラノで語るのか、サルデーニャで語るのかによって偏差があることは言うまでもない。ここでは、議論を全面展開せず、語るという営為について基本的な点のみ確認する。

まず日本〔語〕で沖縄を語るという営為である。本稿の最後で言及するように、日本社会の歴史的規定性の中で生きるものにとっては、この語りには大いなる困難がつきまとう。この困難をのりこえるための迂回路として選ばれたのが、イタリア〔語〕で沖縄を語るという試みであった。しかしここでは、ステレオタイプを生産する危険性を強く意識せざるを得ない。私によってイタリア〔語〕で語られた「沖縄」は、受け取り手が持つ理解の枠組みの中で整理され消費されるという危険性である。

次には、自分の足元を見直すための、方法としての地中海への「旅」の途上でおこなわれた知覚・認識行為に即して（そこではすでに自己と対象との相互浸透が起こっている）、日本〔語〕でサルデーニャを語る。この時すでに語り手の中には、複数の「社会的文脈／水脈（*contesto sociale*）」が存



在し、サルデーニャを語る時には沖縄が念頭におかれ、沖縄を語っているつもりがサルデーニャを語っているという、混交状態が生じている。複数の言語・文化体験をもつ人間は、感情表現のみならず時代認識や社会認識を、ひとつの言語体系で十全に表すことが困難であり、往々にして、そのひとつが表現したい達意眼目のごときものを、ことなる背景をもった複数の言語が混交する形で表現することになる。個々の言語はその言語の背景にある感覚や知覚によって支えられているのだから、複数の“社会的文脈”を生きるものは、それだけトータルな言語表現が困難となる。しかしさらに複雑なのは、こうした混乱がつづらおりになっている状態で、イタリア〔語〕でサルデーニャを語るという営みである(7)。

さて本稿においてとりあげたいのは、こうした語りえないものを語ることの困難さの内でも、日本〔語〕で沖縄を語ることの困難さ、沖縄という実質があり堅固なものを把握し、そして自分で判断することと結び合わせて、おのれの表現にて表しだすことである。そのために、以下のⅡにおいては、イタリア〔語〕で沖縄を語る試みの一例をとりあげ、それをふまえたうえで、Ⅲにおいて、ふたたび日本〔語〕で沖縄を語ることの困難さについて考えてみたい。

## Ⅱ. イタリア〔語〕で沖縄を語るということ

以下は、私がイタリア〔語〕で沖縄を語ることの端緒となった論文「サルデーニャと沖縄 二つの

島嶼社会の開発・発展に関する比較研究」『クワデルニ・ヴォロタネーズィ』一五卷（パッサート・エ・プレゼンテ／イニツィアティヴ・クルトゥラーリ協同編集、発行地ヴォロータナ、一九八九年六月発行）（Michinobu NIHARA, "Sardegna e Okinawa: Considerazioni comparative fra due sviluppi insulari", in *Quaderni bolotanesi*, n.15, 1989）の日本語訳である。読者は、サルデーニャおよび地中海島嶼社会の歴史・文化・言語に関心をもち、地中海島嶼社会との比較で沖縄について考えることが可能な人々である（これ以後の沖縄とサルデーニャを語る試みについては注（7）を参照されたい）。

（はじめに）

サルデーニャと沖縄の比較研究は、両者の状況がきわめて異なっているのにもかかわらず、可能であると思われる。その理由は、現在端緒についたばかりのこの問題に関する最初のアプローチである本稿の叙述によって明らかにされるであろう。「沖縄（Okinawa）」という言葉には、日本列島の最も南に位置する群島（それは北緯30度から北回帰線に及び、「琉球（Ryukyu）」という名前でも知られ、九州と台湾の間で弧状にひろがっている）という意味と、この群島の中心の島という意味とがある。行政上この群島は、沖縄県を構成している。従って、「琉球」という語は、この群島を表わした

めの地理用語、「沖縄」という語は行政上の用語であると言えるのだが、しかしこれら言葉は、同時に民族・文化的な意味合いも持っていると言えよう。本稿は、沖縄の複雑な現実の中で、民族的・文化的・社会的なアイデンティティに絞って論ずることとする。

#### （沖縄の歴史的文化的固有性）

沖縄は、現在一二〇万程の人口を有し、沖縄本島の県庁所在地「那覇」には、約三〇万の住民が暮らしている。沖縄は、日本の他の諸地域と比して、歴史的にも文化的にも固有の性格を持っていた（中央集権的で文化的に同質だといわれる日本の地域社会も、もともとは雑多な社会であったのだが）。

一五世紀、沖縄は血縁共同体を基礎にした尚王朝によって統一されたが、この時点では日本本土からの自律性を保っていた。しかし、一六〇九年、九州の南部に勢力範囲を持つ薩摩藩に征服される。そして日本の政治的・経済的・社会的現実にも本格的に組み込まれたのは、一九世紀後半である。その後の沖縄は、アジアへとその勢力範囲を拡大していく日本の「橋頭堡」という性格を持たされた。こうした状況を、沖縄の知識人は、日本社会の都合によって切り捨てられる「トカゲのしっぽ」という隠喩で表現している（8）。この性格は、明治時代における清国との分島・改約案（西欧なみの最恵国待遇と引き換えに宮古・八重山を割譲する案）、第二次大戦における地上戦、サンフランシスコ条約

における沖縄割譲などに、一貫して引き継がれた。こうした表現がなされる背景には、民衆のレヴェルにおいても、沖縄が日本社会の「開発・発展」の過程において様々な仕方で搾取されてきたという感情があるからである。

こうした感情は、とりわけ現代史における沖縄人の体験に由来している。第二次大戦末期、沖縄では地上戦が展開され、その中で、日本軍による食料の強奪、集団自決の強制、スパイ容疑による虐殺が行なわれた。これは、他のアジア地域において日本軍が行なってきた行為と相通ずるものであった(9)。日本軍の兵士は、沖縄の人間が真正正銘の日本人であるとは考えておらず、むしろ彼らの内にアメリカ軍のスパイがいるのではないかと考えたからである。日本軍は、天皇制(10)保持をその究極の目的としており、日本近代史における開発・発展が、天皇制と深く結びついていたが故に、沖縄は、天皇制を守る最後の砦として選択されたのである。

沖縄の日本における位置を明らかにするために、天皇制と開発・発展の関係について少し説明せねばならない。天皇制は、日本の近現代史において、きわめて単線的な構造を持つ資本主義的開発・発展を実現するための梃子(てこ)の役割を果たしてきたと言ってよいかも知れない(11)。天皇は、明治以来、それまでばらばらの封建制の藩によって形成されていた日本社会を統合する道具として、一元、国家体制の象徴としての意味を担った。戦前の天皇は、圧倒的な権威と、政策決定過程において支配層の意見が分裂していた場合における言葉の重みと、大衆統合のイデオロギーという側面を

持っていた。戦後は、憲法によって国政に関与することを禁止されたが、天皇批判は社会的タブーとしてむしろ強化され、個々人に内面化した支配的な社会構造（小集団単位の同質化／異質排除と効率性の追求と欲望個人主義）のコアという意味を持つにいたった。日本人のアイデンティティは、このシステムによって規定された場合、天皇を頂点としたピラミッド型の社会関係の中に位置付けられる（12）。近代化の過程で入念に作り上げられてきた、この日本の社会関係の基本枠組（日本人における他者とのかわり方）によって、日本の民衆は、かつては軍事的そして現在は経済的な「発展」の協力者となることを可能にしたのである（13）。

それゆえ、沖縄戦は、きわめて特殊な事例ではなく、日本社会にとってきわめて根源的な問題のひとつを構成している。すなわち、脱亜入欧の選択、富国強兵政策、天皇制の徹底、アジアへの侵略行為、沖縄戦、広島・長崎への原爆投下という近代日本社会の開発・発展の過程の中の避け難い帰結の一つなのである。

さて、敗戦後、日本占領が終結した時、天皇制の維持と引き換えにされる形で、沖縄の米軍による支配は、固定化された。太平洋の要石として現在も日本全体の米軍基地の大半が沖縄に存在するのだが、その基地の建設に際して、沖縄の農民の土地は押収され、その多くは、基地労働者となるかあるいは移民となることを余儀なくされた。

米軍は基地の安定使用を図るために、基地従業員の雇用に加えて、軍用地料、基地援助金、日本政

府による援助金などによって、沖縄を基地依存の消費型経済にすることに尽力した。その後、いわゆる「高度成長」と呼ばれる時期に（一九五五―七二年）、アメリカは、日本政府の財政肩代りをより推進するために（既に一九七〇年には日本政府の援助金は、沖縄の財政の三〇％を占めていた）、一九七二年、沖縄は日本に返還された。返還後は、急速に日本社会へと統合されていくのだが、米軍基地に加えて日本の自衛隊の基地と日本企業が進出したために、沖縄固有の文化との間の軋轢も大きく、変化の波についていけない人々が続出した。沖縄は、日本国内では、日本社会の矛盾がもつとも可視的な地域であり、そのため住民の抵抗も他の地域に比して強かった。しかし、様々な開発計画と財政援助によって、沖縄社会は確実に変容してきている。

こうした歴史に加えて沖縄は、文化的にも特性を持っている。この特性は、社会変容が進む今日においても、まだ見てとることが可能である。著名な沖縄の作家、大城立裕によれば、沖縄の共同体は、「共同体と個人との関係に二つのありかたがある。共同体が個人を守る側面と、個人が共同体のために犠牲になる側面とである。沖縄の場合は前者の性格がつよく、本土の場合は後者の側面が強い」（14）。事実、沖縄においては、知り合ったら兄弟のように親しくなる、祖先崇拜、敵をも歓待して退散を願う思想、共同労働、共同経営、経済的相互扶助、共同店などの特徴が、急速に消滅しつつあるにせよ、今日まで残ってきている（15）。

これは沖縄のみならず日本社会一般に言えることであるのだが、日本の共同体においては、「内」

と「外」という観念がきわめて重要な意味を持ってきた(16)。「ウチ」は、もともと共同体(あるいは、「家」、家族、小集団)の内側を意味し、「ソト」はまさにこの境界線の外部を表わしていた。

日本の社会学者、鶴見和子の指摘によるならば、共同体内部の社会関係は、“hierarchical and coequal”という二つの要素を持っていた。この二つの要素は、相互補完的でもありまた相互に背反する性格も有していた(17)。つまり、日本の共同体においては、共同体の内部の人間と外部の人間は明確に区別され、内部においては、きわめてアンヴィヴァレントで複雑な社会関係が存在していた。そして、共同体の内部の人間に対しては、外敵に対する抵抗力を保持するために、きわめて強い同質性が要求された。

事実、沖縄の共同体のみならず、他の日本の諸地域の共同体においても、共同体の内部においては、「すべての人間を同等であるかのごとく扱う」関係が存在し、外部に対しては中央権力に対する一定の抵抗力が存在していた。しかしながら、こうした共同体の性格には、一定の限界があったのも事実である。共同体の成員は、共同体全体の利害と関わる決定に際して、村の長(ないしは年長者)の指示をおおぐという形式をとる(それは、成員の要求と深く結びつくことによって外在的というより内在的な権威となっているのであるが)。ひとたび、こうした決定が権力におもねるものであり住民の要求に背反するものであったとしても、指導者の決定に反対するのはきわめて困難であった。

共同体は、統合と抵抗の過程を経ながら、行政の一単位として天皇制国家の「細胞」という側面を

担うようになり、天皇制国家システムのピラミッドの中に組み込まれた。統合の度合が比較的弱かった沖縄の共同体においても、開発政策にともなう変容は起こりつつある。地域の将来を決定するという役割は、開発政策の推進者である中央政府の代理人、あるいは政府与党の利害の代弁者へと肩代りされてきているのである。

#### （沖縄人のアイデンティティの問題）

沖縄の共同体がもともと有していた文化的特性は、日本社会の文化よりも、東南アジアに近いものであると言われる。歴史的にも、沖縄と台湾・東南アジアとの間の交易が盛んに行われた時期があった。それに加えて、日本社会による犠牲者であるという点で共通性を持っていることもあって、沖縄の人々は、アジアの人々に心理的親近感を持っている。今日に至るまで、沖縄の人々は、他の日本人に対して、一定の距離感を持っている。それは、他の日本人を「ヤマトンチュ」と呼称することにも現われている<sup>(18)</sup>。いくつかの世論調査によれば、沖縄の人々の他の日本人と比べて、天皇制に対する不信感を抱いている。もしこう言ってよいとするなら、沖縄の人々のアイデンティティは、他の日本人のそれよりも、アジアの人々により近いものかも知れない。

にもかかわらず、沖縄の人々はへきわめてアンヴィヴァレントな位置から逃れることは出来ない。



それは、沖縄の人間が持たざるを得ない二つの顔のためである。ふたたび大城立裕によるなら、「沖縄人に二つの顔があると、私は考える。本来のオリジナルな「沖縄」の顔と、日本人の一部分としての顔である。移民地では、前者が強調されているときに現地人と同和し、後者が強調されるときに現地人のことを「ガイジン」とよんで差別するのである。」(19)

私見によれば、同様のアイデンティティの問題は、サルデーニャの人々も抱えている。沖縄人の場合は、個々人がきわめて重層的なアイデンティティを有している。たとえば、沖縄人同士の間では、自分の出身の村のアイデンティティが顔を出す。沖縄人というアイデンティティが顔を出すのは、外部の人間とりわけ他の日本人に相対した時である。アジアの人々あるいは外国の人々に対しては、置かれた状況に応じて「二つの顔」の内のどちらかが顔を出すのである。こうしたアイデンティティの問題がもっとも顕著に現われるのは、日系移民社会においてである。海外における日系移民は、他の移民と比して、きわめて強固な集団を形成するのだが、とりわけ沖縄系移民は、他の日系移民と比しても、より緊密な関係を持って暮らす。今日きわめて多くの沖縄系移民が、各地で生活しており、沖縄系の人々は、海外に暮らす日本人の中で約一―%を占めている(海外移住者の中で相対的な多数派を形成していることになる)。少なくとも第二次大戦後に、沖縄からアメリカ大陸へと契約移民として渡った人々の多くは、米軍基地設営のために土地を撤収された農民であった。また、彼らの多くは、戦争中日本の植民地であった朝鮮、台湾、満州などからの引き揚げ者であった。

ボリビアの例を挙げるなら、沖縄系の人々は、ボリビアで暮らす日本人の中で約六〇%を占めている（九九〇〇名の中の六〇〇〇名）<sup>(20)</sup>。沖縄系は、他の移住者から、“*medio-chino*”（半分中国人）という蔑称で呼ばれることがある<sup>(21)</sup>。日本の外でも、沖縄と日本という図式が存在していて、日系移民は、アンデスを越えてもなお、もうひとつの沖縄ともうひとつの日本があるかのように行動しているのである。

石田甚太郎によれば、ボリビアの先住民に対しては、沖縄系であれ他の日系人であれ、「土人」という呼び方をして軽蔑している。多国籍企業と独裁政権に対する労働者・農民の闘争に関しては、語学の壁もあり関知せず、選挙では軍事独裁政権を支持している。また、ボリビアの歴史・文化・生活を知ろうとせず、子供の教育に関しては、国立の学校とは別の私立の日本人学校を作る。さらに、地元のエリート層を育成するために、高校の建設を企図する。そして、ボリビア政府が移住者に委託した「原始林」（そこで生活する先住者がいたのにもかかわらず）で、一七―一八年間放置していた土地をボリビア人が開墾し始めたことをめぐって、ボリビア人との対立が起こり裁判で敗訴した移住者は、「外交問題」として圧力をかける<sup>(22)</sup>。

以上述べてきたような社会的態度は、それゆえ、日本社会の開発・発展の過程において重要な役割を果たしてきた天皇を頂点としたピラミッド型の社会関係によって規定されている。熱帯林に入植し、共同体の中で相互に助け合いよく働いた結果、一部は事業家となる。老人、あるいはボリビア人の農

業労働者が土地を守り、息子の家族は町に住み、車で通い農業をする。没落した場合は、息子は日本へ出稼ぎ、老人は家に残り、妻子は交通の便のいい地域に移住する。そして異質な他者と結びつくことによって文化的に豊富化する可能性を減じる(23)。

こうした日本人としての「顔」は、沖縄の小さな村にまでも浸透しつつある。沖縄人のアイデンティティの中に、こうした「顔」が、支配的文化である東京型の生活様式の浸透という形をとって進んでいる。「日本人らしさ」とは、一つの国家、一つの民族、一つの言語を自明のモデルとして、外敵に対しては階級を超えて結束し、集団の内部では同僚と競争することによって、個人としても集団としても上昇していこうとする性質である。自分の足元を見ようとせず、上昇の過程で生じる周りとの軋轢や、抑圧移譲を見ようとしめない。

このように沖縄人は、島社会がもつ開かれた文化を持ちつつも、アジアの人々やアイヌ(24)の人々との間で、民衆レヴェルの交流、いわゆる人際交流を進める時に困難がないわけではない。というのは、まず沖縄の人々は、(開発・発展の過程で造り出された支配的な規範としての)自らの内なる「日本人の顔」を見直さなければならぬからである。

(開発・発展、従属、そして自立の問題)

沖縄の人々は、日本の開発・発展の諸問題をもっとも苛酷な形で背負ってきたと言える。沖縄の人々にとって、「開発・発展」は、しばしば構造的な暴力、すなわち戦争のみならず環境破壊や日常生活の解体と結びついていた。

石垣島の一例を挙げよう。現在、琉球弧の南端に位置するこの島では、沖縄県庁が中心となって新空港の建設が計画されている。しかし空港建設が予定されている白保には、世界でも有数の珊瑚礁がある。この珊瑚礁は漁場としてもすぐれており、白保の住民の生活と深くつながっている。もともと沖縄全域が、きわめて豊かな珊瑚礁地帯であったのだが、復帰後の開発で赤土の流出などによって、その大部分は破壊された。

新空港建設計画の問題点は、白保の自然環境が破壊されるということだけでなく、新空港が軍事的で使用する可能性もあるということにもある（というのは、石垣島は、極東において最大規模の米軍基地がある沖縄本島とフィリピンのちょうど中間地点にあたっているからである）（25）。

今日、沖縄の人々は、沖縄そのものが置かれているアンヴィヴァレントな位置についての問題を抱えており、それは前述のアイデンティティの問題とも関わってくる。沖縄では、知識人を中心として様々なタイプの「自立」論が提示されている（経済自立論、自治州論、特別県制論、分離・独立論、沖縄共同体社会主義論、琉球共和国論、など）。

しかし、そこでつねに問題となるのは、開発・発展と自立との間のジレンマである。確かに、「開

発」の名の下に、米軍基地や石油備蓄基地、本土資本などが、沖縄人の日常生活に侵入してきた。しかしながら、日本政府からの財政援助は生活構造を規定している（財政援助は、県民総生産の約四〇％を占めているが、投下された資金は地元浸透せず域外へと流出していく）。

それゆえ、自立の問題をつきつめていくなら、沖縄の人々は、様々な犠牲に対する権利回復要求として財政援助を求める圧力団体となるのでもなく、日本社会への統合から個人的にドロップアウト（たとえば、支配的な規範の圧力に対する個人的な対応として現われる身体的・精神的疾患）するのではないような、「第三の道」を見いださざるを得ないであろう。

（誰が自立を実現させるのか、誰のための開発・発展か）

サルデーニャと沖縄は、一見したところ、地方自治などの状況が大きくことなるイタリアと日本という別の国家に属しつつも、歴史的・文化的な固有性を有していた地域が一国の開発・発展の過程において徐々に統合され、そのことによってアイデンティティの問題が顕在化し、中央の都合によって誘発された「開発」であったために、移民、基地、観光、などの問題を抱えている——という点において共通性を持っている。しかしながら、最も重要な点は、この二つの地域が、各々の現実に適応的な開発・発展の方向を模索しているという点にある。そしてそれぞれの住民は、自らの解答を出しう

る潜在力を持っているはずである。

模索の試みとして、わたくしは、名護市における試みを紹介して結びの代わりとしたい。一九七〇年代に、本土から来た建築家の集団「象グループ」が、名護市の地域計画に加わり、「本土から見た沖縄の良さ」を発見した。彼らは、徹底的なフィールドワークによって、地域の環境が持つ潜在力に着目し、各々の自然的・社会的資源（海、木々、石、川など、そしてそうした環境と相補的關係を作ってきた生活の知恵など）の価値を明らかにしていった。当時の「古いものはよくない」という風潮に対して、数字で示されない沖縄の豊かさを示唆した。これは名護市基本構想として結実し、地域の見直しに貢献したのである。〔以上、イタリア語論文より訳出〕

### Ⅲ. ふたたび、日本〔語〕で沖縄を語るということ

さて、いまⅡで見てきたイタリア語論文“Sardegna e Okinawa: Considerazioni comparative fra due sviluppi insulari”で叙述されたイタリア〔語〕における沖縄の語りにおいて問題であったのは何か。事実誤認や理解不足から来る問題点は多々ある。しかし問題の本質は、むしろ、沖縄を対象としてみていた社会学者である筆者が、無意識の内にもっていた思考の枠組みにこそある。日本社会の文脈において、対象化することをはばかれる沖縄が、一度は本来の文脈から切り離されることによって、かろうじて言語化された。しかしながら、ここでの叙述に見られる思考枠組みは、権

力関係をともなった相関性に着目し、全体社会との関わりにおいて沖縄の構造把握を試みるものである。つまり、日本社会の中心的な問題をみるための参照点として、観察者の世界観に応じて沖縄に意味付与をしていた。その意味では、ここでのイタリア語の語りは、沖縄・日本、サルデーニャ・イタリアという二つの系を外側から見て論じるにとどまっており、この論文以後の試み（註（7））の中で克服の対象となったものである。

形式論理的な推論によって思考が展開される場合、内容はどこか外から付与される。命題によって形式的同等性のみ問題にする場合、たとえば「沖縄は民族ではない」といった時には、対象を全否定し、内容にふれることもなく空虚な自我（命題に主観的な判断をくだす自我）に曲がりもどっている。「沖縄は民族だ」といった時には、自我は前におかれた主語（基体）として、内容は述語（偶有性）としてあらわれるだけであり、いずれにしてもそこには外面的なつながりしか存在しない。論理は内容から切り離されて、空虚な整合性のみが求められる。

しかしながら、内容（Inhalt）とは本来、具体的に現実的（wirklich）<sup>1</sup> wirklich = wirken, actually, act、意志するもの、動くもの、何かに働きかけるものであるから、常にひとところにとどまらず展開することがら（存在と認識の媒介されたもの）としてあるはずだ。己れを保持しようとする、対象のところまでいっても、対象との境界（Grenze）から引き戻ってくるしかない。対象の中で己れを失い、対象の内では有機化されることによって傍観者としての自己を失う。存在そのものの本性、そ

の内的必然性として、ガラス越しに対象を見る純粋な思考など不可能であり、考えるとは存在と契る (s'engager) ことである。

この存在の必然性が実は論理的必然性でもある。内容は論理化されることで自身の固有の (einheimisch) 形式を表出する。こうしてはじめて内容が形式をもたらし、その場合の叙述の形式は具体的内容そのものとなる。このようなプロセスをひとことではいえず、formazione なるものが形成される、という言葉で表されるものだろう。学問の営みとは、自身の領域 (Element) '己' に対するもの (fürsichseind) としてある対象までも、はじめから、つまり根本的な立脚点にまでさかのぼって、自ら設定する営みである。通常の緒科学は、既存の知の総体の中に固有の領域を確保している。しかし、考えるという営みは、わく組そのものを自らの領域としている。わく組そのものを考へるとは、知を図式的に整理してまとめるものではない。枯れて死んだ問題を後から (あるいは生々しい問題を凍死させてから) よせあつめるものではない。考えるとは生々しいものである、それゆえ考えるとは危険なものである。沖繩を考えるとはその意味で危険なものだ。

沖繩「戦」という語りえない内容 (Inhalt) をもちつつ生きる当事者の心には何が去来するのか。日々の仕事を片づけることはできたとしても、その内面における葛藤は、日常的な意識の水面下で濁流となり、叫ぼうとしても言葉にならない。語りたくない、語れない反面、自分の体験したことを語る相手を求める。そのような相手を欠く場合、その社会的体験は語られぬまま、澱 (おり) のような



ものとして個々人の内面に沈殿していく。それゆえに個々人が表し出す情報、コミュニケーションの手段は、言葉だけではない、言葉以外に身体があらわすところの様々な身ぶり、手振り、表情などの中には表しだしたい達意眼目が脈打っている。それについて書かれることや語られることがたとえなくとも、同じような体験をもつものにとっては、そこに何かがあることが感じられ、わかっている。

では語れないことを語る時というのはどのような時か。混乱からの蘇生、日常世界への帰還、からだところを通り過ぎていきつつあることがらを、自分の中で咀嚼しようともがくことなしには、何にも手がつかないという状況にある時である。言葉にすることで、名状しがたいことがらを少しでも「石化」させ、つなぎとめる。混乱の内にあつたことがらを「石化」させることで生み出された言葉は、濁流と化した水脈の中で、おぼれかけ、もがいていたものがつかまることできる、水面下にわずかばかりの根をはった水草のごときものとなる。言語化することとは自分の中に既にある実質的なもの、堅固なものを把握することである。なんらかの知的な覚醒の契機を経ることなしには、事物は自分の身体をただ通り過ぎていくにすぎない。自分のからだところに何かが流れ込んでいるのだと感覚的に経験し、知覚し（*wahrnehmen*）、認識する。さらにこの自分の中にある変動を、自分が感覚するのみならず、知覚し、認識したというそれぞれの経験がかさねあわせられる。ガラス越しに対象を眺めるだけでは認識したことにはならない。かといってただ通り抜けるだけでは手元に残るものはない。澱のように沈殿したものはただ埋もれていくだけである。すべての契機をかさねあわせ

ではじめて、自身の“経験”の構造を把握する (begreifen) ことになる。体験とはただ生起する史実を通り抜ける (fahren) ことであるが、経験する (erfahren) とは、自らが体験したことから、痛みをとまなう形で (なぜなら自己の解体に直面するから) 自らを切り刻み (analysieren) ことの中から自己を埋め込みかつそこから切り離すという道行きである。そうして人は、はじめて自分がなにものであるかと知る (bekennen) だけでなく、認識する (erkennen) のである。

ともあれこの一〇年の間にやってきたことは、最初に出会ったもの、私が見た原風景としてのサルデーニャ社会と沖縄社会が何であるかを言葉にするための試みであった。最初に見て受けとめた原風景の中にはすべての要素 (Element) が財 (Eigentum) としておかれていたのだ (当初はそのことに気付かなかったとしても)。そこにあるのに見えないものを見る。そのために、最初は自分の足元である日本社会を見るために旅立った沖縄社会からさらにサルデーニャへと旅立ち、サルデーニャの中の、見えないサルデーニャを見るために、今度はサルデーニャから旅立つことが必要となった。足元を見るために沖縄とサルデーニャを、沖縄とサルデーニャを見るために、イタリア本土へ、コルシカへ、ドイツへ、スウェーデンへ、日本へ、ブラジルへとあらたな旅をつらねる必要が生じた。旅はあらたな体験を旅人にもたらずが、そこで感覚され知覚されたものをあらわすのにふさわしいカテゴリーを当人がもっているとは限らない。それがあらたな体験であればあるほど、その体験を、これまでの自己形成の過程で獲得していたカテゴリーによって区画整理をして、その箱の中にいろいろな対

象をあてはめることには違和感をおぼえる。旅は固定化された思考に流動化をもたらすのである。

本稿の最後に、ふたたび日本〔語〕で沖縄を語るとは何かという問いを発してみよう。語りえないもの、語られなかったものを語るとはいかなる営為か。これは、ヨーロッパ人にとって、ホロコースト以後、事実を語ることの不可能性が強く意識されたのと類比しうるような問題である(26)。他方で、島社会としての沖縄と沖縄人が形成してきた、文化や国家の境界をこえていく力は、その内容にふさわしい言葉で表されねばならない。それゆえ私は、いまだに日本〔語〕で沖縄を語る言葉をもたない。いまもし語るとすれば、語ることの不可能性を、様々な表現方法によって語ることのみができることである(27)。それゆえ、逆説的ではあるが、こわれた言葉、混乱した言葉で、蛇行しつつ、繰り返しつつ、沖縄とサルデーニャを語りつづけいくであろう(28)。

## 注

- (1) イタリア語の *contesto sociale* という言葉は、文脈、文章の前後関係という意味のみならず、事実の布置  
連関、前後関係、状況、背景といった意味が含意されている。しかも *contesto sociale* といった場  
合の、*sociale* の単位が大枠ではイタリア社会をさすとしても、それ以外に州の単位 (*regionale*) であつ  
たり、もう少し狭い範囲の地域 (*locale*) や小さな集落であったりする。それゆえ日本語で表現する場合  
には、文脈のみならず水脈という言葉を当てる必要があるかもしれない。

さらに付言するなら、'contesto sociale' すなわち社会的文脈とそれを支える社会的水脈は、他の都市や地域のそれとの共通性をはらみながらも、個々の要素 (elementi) が結び合わさり、あるいはぶつかり、切り結ぶことによって固有の社会的文脈を形成してきたという意味では、同じものとしてはくり返されない水脈をもつものである。個々の都市や地域は、その解体と再編の過程のある局面をとらえてみれば、表面上は似た様相を呈しているのにもかかわらず、その内実すなわち—個々の地域住民の中に刻み込まれた記憶、言語表現、生活信条、それとズレを起こしたりしつつもなされている暮らし、仕事、闘争、制度の諸過程、等々の相互作用のあり方—は、代替不可能なものである。もしこのような意味における社会的文脈／水脈の中に蓄積され消失し創造され革新されてきた「根 (radice)」の諸要素の関わり方を把握することができたら、それはとりもなおさず、個々の代替不可能な、ことなる社会的文脈／水脈における社会革新の先行条件を見きわめることにつながるはずである。

(2) サルデーニャにおけるこの一〇年のフィールドワークをまとめた新原道信『ホモ・モーベンス』(窓社、一九九七年)において詳しく論じている。比較島嶼社会研究におけるサルデーニャと沖縄の位置付けについては、新原道信「沖縄の自立と内発的發展を考える—地中海島嶼社会との比較で—」『平和研究』一七号、日本平和学会、早稲田大学出版部、一九九二年において論じ、「複合社会」化する地域をどう捉えるか—サルデーニャと沖縄における人の移動と地域社会のダイナミズム—「地域社会学会第一七回大会、シンポジウム『地域問題にあらわれたる今日の転換期—地域を越える地域の思想—』(一九九二年五月一六

―一七日、於、東京大学）という形で報告した。

- (3) 『土地勘がある』という言葉は、そこで生まれ育った、何年か住んだことがあるという意味ではなく、その社会の『社会的文脈』を社会科学のレベルで把握する努力を積み重ねてきた場所であるという意味で使っている。たとえば私の父親が、日韓併合の後すぐに朝鮮半島にわたった「移民」の三世であり、そこから数えて私は四世にあたるということによって、『移動民 (homo movens)』の実質 (Substanz) を理解していることにはならない。ただそこに暮らしているからとか、自分のことだから把握できているということにはならない。このことに、なんらかのひっかかりは感じるが、できる限り気にしないようにして社会生活を営むことはできる。しかしその一方でこのことが自分を拘束していることには、うっすらと気付いている (ahnen)。拘束からわが身を解き放つための社会学が必要となる。

- (4) 村井紀『南島イデオロギーの発生―柳田国男と植民地主義―』福武書店、一四―一五頁。

- (5) 一九八五年より、沖縄、広島、長崎および東京近郊の諸地域における地域調査を、一九八七年には、イタリア・サルデーニャ州における地域調査を行なっている。沖縄調査の成果は、『対抗文化の可能性―沖縄・広島・長崎における生活の見直しと自立への動き―』『平和運動の思想と組織に関する政治社会学的研究』（昭和六〇―六二年度科学研究費補助金（総合A）研究成果報告書、研究代表者・吉原功、一九八八年）においてひとまずまとめ、サルデーニャ調査の成果は、『イタリア・サルデーニャ州における地域開発と知識人の意識―地域の内発的發展に関する意見聴取より―』地域社会学会第一三回大会（一九八八年

四月二三―二四日、於、法政大学」という形で発表している。

- (6) 自身のこだわりは奥底に携えたまま、一度はそれと切れた形で他者の中に入って格闘してみて、その過程で自分が変わっていくことをよしとしつつ、もう一度、最初の地点とつき合わせてみて、自分がかわったということ自らの「場(arena)」において具現化してみせる。この場合、「寄寓者」としての自己と別の「場」における他者との社会関係、相互行為という契機、「定住者」にもどった(あるいは、「定住者」となった)自己と自分の「場」における他者との社会関係、相互行為という契機が内包されている。「方法としての旅」については、新原道信「方法としての地中海への旅(itinerario)」―日本社会と日本人を再発見するために―奥山真知・田巻松雄編『二〇世紀末の諸相―資本・国家・民族と「国際化」―』八千代出版、一九九三年を参照されたい。

- (7) 日本〔語〕でサルデーニャを語る、イタリア〔語〕でサルデーニャを語るというところについてはここでは論じない。サルデーニャの研究者および研究機関と筆者とは一〇年間にわたる研究交流の歴史を持ち、その間に研究交流の成果として公表されたものにはおよそ以下のものがある。※は沖縄について言及したものである。

※Michinobu NIIHARA, "Sardegna e Okinawa: Considerazioni comparative fra due sviluppi insulari", in *Quaderni bolotanesi*, n.15, 1989.

※-----, "Migrazione e formazione di minoranze: l'altro Giappone all'estero e gli 'estranei', in

Giappone. Comparazioni col caso sardo”, relazione presentata al corso di Sociologia di sviluppo e di Sociologia della famiglia e dell’educazione (prof. Alberto MERLER, Facoltà di Magistero, Università di Sassari, l’anno accademico 1988-1989).

※-----, “Alcune considerazioni sulla vita quotidiana e sul processo dello sviluppo. Confronto fra due processi: Giappone - Okinawa e Italia - Sardegna”, in Il grandevetro, n.102, 1989.

※-----, “Sardegna, Okinawa ed i popoli migratori”, relazione presentata al convegno sul tema “Sardegna: lingua, cultura e società” presso l’Istituto italiano di Cultura di Colonia, organizzato dal Circolo Sardo “Nuova Rinascita” di Colonia, il 29-30 aprile 1989.

※-----, “Le problematiche dello sviluppo giapponese”, relazione presentata al convegno

“Crescita e sviluppo della Sardegna: traiettorie reali e indirizzi auspicabili” del XXVI Premio Iglesias, 10 novembre 1989.

-----, “小さな主体の潜在力ーイタリア・サルデーニャ島の「開発・発展」をめぐってー”季刊『窓』二号 (窓社、一九九〇年三月)。

-----, “地域の内発的発展の先行条件に関する一考察ーサルデーニャにおける『地域問題把握の過程と知識人ー』”『人文研究』二〇号 (千葉大学文学部、一九九一年三月)。

-----, “統合ヨーロッパの内なる『島』と『群島』ーイタリア・サルデーニャの移民が選択した協同への回

路』『思想と現代』二五号（白石書店、一九九一年四月）。

――「内発的発展の理論と地域社会の現実―地中海島嶼社会における理論化の試みに即して―」六四回  
日本社会学会、一般研究報告Ⅲ（一九九一年一月三―四日、於、筑波大学）。

――「島嶼社会論の試み―「複合」社会の把握に関する社会学的考察―」『人文研究』二二号（千葉大学文  
学部、一九九二年三月）。

――「ひとつのヨーロッパ・もうひとつのヨーロッパ―イタリアにおける「複合社会」論の展開が意味す  
るもの―」関東社会学会『年報社会学論集』五号（一九九二年六月）。

――「Un tentativo di ragionare sulla teoria dell'insularità. Considerazioni sociologiche sulle  
realità della società composita e complessa: Sardegna e Giappone», in Quaderni bolotanesi,  
n.18, 1992.

※――「沖縄の自立と内発的発展を考える―地中海島嶼社会との比較で―」日本平和学会『平和研究』（一  
九九二年一月）。

※――「「複合社会」化する地域をどう捉えるか―サルデーニャと沖縄における人の移動と地域社会のダ  
イナミズム―」地域社会学会第一七回大会、シンポジウム『地域問題にあらわれたる今日の転換期―地  
域を越える地域の思想―』（一九九二年五月一六―一七日、於、東京大学）。

――「方法としての地中海への「旅」(itinerario)―日本社会と日本人を再発見するために―」奥山真知



・田巻松雄編『二〇世紀末の諸相―資本・国家・民族と「国際化」―』（八千代出版、一九九三年三月）。  
 ー「イタリア社会の再発見―混成社会―に関する社会学的考察―」『人文研究』二二二号（千葉大学文学部、一九九三年三月）。

※――, “Un itinerario nel Mediterraneo per riscoprire il Giappone e i giapponesi, Isole a confronto: Giappone e Sardegna”, Dipartimento di Economia Istituzioni e Società, Sassari, 8 novembre 1993. Ⅱ国際シンポジウム『二つの島嶼社会の比較 日本とサルデーニャ』（一九九三年一月八日、於、サッサリ大学）。

――, 「アルベルト・メルレル教授に関して」アルベルト・メルレル「社会・環境的なパーク、島嶼性、自立Ⅱ自治―地中海世界における一考察―」小林甫訳の解説論文、北海道大学教育学部『産業と教育』一二号別刷、一九九四年二月。

※――, “Isole, Arcipelaghi e Catena di isole nelle città. Superare una teoria Urban Ethnicity,” “Isole socio-culturali nelle città” Ⅱ「都市の中の「島」と「群島」そして「列島」―Urban Ethnicity論をうけて―」国際シンポジウム『都市の中の社会・文化的な島』（一九九四年三月二五日、於、サッサリ大学）。

※――, 「地域社会研究における比較と交流にむけて」地域社会学会、第一九回大会シンポジウム『地域社会研究における比較と交流』（一九九四年五月二二―二三日、於、東京女子大学）。

※----, "Un itinerario nel Mediterraneo per riscoprire il Giappone e i giapponesi, Isole a confronto: Giappone e Sardegna", in Quaderni bolotanesi, n.20, 1994.

----, "Come viene vista la zona settentrionale del Giappone? EZO e il popolo degli AINU. Etnie composite nelle isole Hokkaido, Sahalin e Curili", Dipartimento di Economia Istituzioni e Società, Sassari, 28 novembre 1994.

※----, "Gli occhi dell'oloturia. Mediterraneo insulare e Giappone," in Civiltà del Mare, anno V, n.6, 1995.

※----, 『素人』の学としての沖縄関係学 『沖縄関係学研究会論集 創刊号』一九九五年六月。

----, 「イタリアの地方大学における地域形成と人間形成の試みーサッサリ大学を基盤としたA.メルレルの教育・研究活動についてー」『経済と貿易』一六九号, 一九九五年六月。

----, 「移動民の都市社会学ー方法としての旅をつらねてー」奥田道大編『コミュニティとエスニシティ』勁草書房, 一九九五年九月。

----, 「地中海の『クレオール』ー生成するサルデーニャ人ー」『現代思想』vol.24-13, 一九九六年一月。

※M. NIIHARA e A. MERLER 「地中海の島々と沖縄」『沖縄関係学研究会論集 第二集』一九九六年六月。

(8) 新崎盛暉の議論を参照されたい。C. 新崎盛暉『日本になった沖縄』(有斐閣新書、一九八七年)。尚、この注から(25)までは、イタリア語版に付けられていた注の日本語訳である。

(9) 沖縄戦やアジアへの侵略・虐殺行為についての情報は今日でもきわめて制限されており、この問題については当事者と日本政府との間に大きな認識の違いがある。

(10) 天皇制については、『ニューズウィーク (Newsweek, January 16, 1989, p.24)』の説明が的を得ている。天皇制国家として日本は、一八六八年から一九一二年にかけては明治天皇の名のもとに、一九一二年から一九二六年にかけては大正天皇、そして一九二六年から一九四五年にかけては、昭和天皇(個人名はヒロヒト)の名の下に「統治」された。その後、一九四五年から一九八九年にかけても、昭和天皇は、日本国の象徴として「君臨」した。一九八九年は、昭和六四年として始まった(これは、ヒロヒトの代になってから六四年目を意味する)が、ヒロヒトが同年一月七日に死亡したため、この年の残りは、ヒロヒトの息子であるアキヒトの最初の年である平成の一年となった。このシステムは、最初から日本人の心の根底にまで浸透していた訳ではない。むしろ、近現代日本の支配階級の努力によって、次第に内面化していったという側面が強い。

(11) この仮説は、沖縄や東南アジアの知識人の間に多々みられるものである。彼らによれば、日本の開発・発展の過程は、天皇制国家という点で一貫している。こうした見方は、第二次大戦後の急速な社会変化に力点を置く多くの日本の知識人の見解と対照的である。

(12) ここでは、東南アジア研究者の鈴木祐司が日本社会のモデルとして提出した「上と下に中枢と周辺を加えたピラミッドモデル」を念頭においている。このモデルは個々人の意識に関するもので、権力者と自分を同一視した上で、自分を中心として同心円的に回りの問題を考える、という心性を表わしている。この個々の人間における構造把握の枠組は、構造化し現実に機能しているのが、日本社会である。鈴木祐司「アジアをどう捉えるか」社会運動研究センター『社会運動』七五号（一九八六年）、同書一一八頁の図。

(13) 小泉充雄「ゆがんだ鏡の中の東南アジア——蔑視拡大の構造を読む——」『世界』（一九八七年八月）。「若い人を勇気づける日本の現在の経済的繁栄への誇り。東南アジアとの関連では、ちょうど中高生を偏差値ではかるように、一人当りGNP、経済成長率、工業化率などのマクロ数字で、日本を頂点に、次に中進国、そしてASEAN、その下にASEANにもなれない他の国ぐに、という偏差値ランク付けをする開発経済学が、私たちの眼の前にある。」（一五〇—一五一頁）

(14) 大城立裕『休息のエネルギー——アジアの中の沖縄——』（農山漁村文化協会、一九八七年）、p.27。

(15) ここで説明しようとしているのは、沖縄の共同体においてきわめて重要な意味を持つ概念——「門中」「ちゅらかさの思想」「ノロ、ユタ」「ユイ」「模合」——を念頭においている。こうした特徴は、圧制と自然の猛威から生き延びるための住民の知恵として形成されてきたものと考えられる。相互依存的な自治組織は積極的側面も持つが、そこでは女性の多大な労働が前提とされていることは忘れてはならない。共同体は、むしろ資本主義市場化が進む過程で共同体を守るために作られたということが玉野井芳郎などによって指

摘されている。

(16) 沖縄の人々が自らを「ウチナー」「ウチナーンチュ」と呼ぶ場合がある。

(17) Cfr. Tsurumi, Kazuko, "Aspects of Endogenous Development in Modern Japan - - Part I.

Social Structure: A Mesh of Hierarchical and Coequal Relationships in Villages and Cities", in Research Paper, Series A36, The Institute of International Relations, Sophia University,

Tokyo, 1979, pp. 27-28.

(18) これは「ウチナーンチュ」の対概念である。「大和」は日本の古い呼び方である。

(19) 大城立裕、前掲書、八―九頁。

(20) 石川友紀「海外沖縄移民社会の歴史と実態」『海外おきなわ最新情報』（沖縄タイムス社、一九八七年）、三一頁。この資料によれば、沖縄系は、日系人の中で、ブラジルでは一〇%、ペルーでは六五%、アルゼンチンでは七〇%を占めている。

(21) 入植者の多くは、東北や九州の農村に生まれ、満蒙開拓団に志願し、現地で兵隊となり、中国から東南アジアへと南下した。ボリビアには、沖縄系の居住地（コロニア・オキナワ）と、他の地方出身者の居住地とがある。後者は、主として長崎県の出身者で構成されている。

(22) 石田甚太郎『ボリビア移民開闢―アンデスの彼方の沖縄と日本―』（現代企画室、一九八六年）、二二九頁。

- (23) 前掲同書、一九五―二二二頁。
- (24) アイヌ民族は、もともと日本列島の北部に住み、自然崇拜を基調とした生活をしていた。日本社会の拡張の過程で、彼らの生活環境は侵害され、とりわけ同化政策によって文化的な破壊がおこなわれた。
- (25) Cfr. Kennochi, Kazumi, "Militarization's Blind Destruction of Shiraho Seashore", *Pacific-Asia Resource Center, AMPO(Japan-Asia Quarterly Review)*, Vol.20, No.1&2, 1988, p.100-101.
- (26) 記憶、表象、想起をめぐる問題については、稿をあらためて論じる必要がある。詳しくは、フリードランダー編、上村忠男・小沢弘明・岩崎稔訳『アウシュヴィッツと表象の限界』（未来社、一九九四年）と鶴飼哲・高橋哲哉編『「シヨアー」の衝撃』（未来社、一九九五年）。
- (27) 本稿で述べてきたような語りのころみとして、一九七〇年一二月のコザ事件に言及した富山一郎の文章をあげることができる。富山一郎「暴動の系譜―一九七〇年二月二〇日、コザ―」『インパクション』九九号（一九九六年一〇月）。
- (28) 本稿で述べてきた語ることの困難さの他方で、サルデーニャ人と沖縄人がもつ潜在力―とりわけ国境や文化の境界をのりこえていく―移動―の力―については以下で論じた。
- 新原道信「地中海の『クレオール』―生成する「サルデーニャ人」―」『現代思想』Vol.24-13, 一九九六年十一月。
- 新原道信「「移動民 (homo movens)」の出会い方」『現代思想』Vol.25-1, 一九九七年一月。